

Title	日本に於けるソリダリティの思想
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.1 (1922. 1) ,p.27- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220101-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220101-0027</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、生産に當ることを強要する権限を持たない限り、獨り労働組合の制限的政策にばかり、苛酷の態度に出づることを許され可きものではない。國家の勞資兩者に臨むや、飽くまでも公正なる態度を以つて、終始しなければならぬ。然らずして一方に與へたる、又認めたるものを他方に許與しない方針を取つたならば、經濟政策の基調は全然崩壊することゝ爲るの外ないからである。

## 日本に於けるソリダリテイの思想

瀧 本 誠 一

近年歐米諸國、就中佛國に於て學者若くは政論家の間に盛に唱道せらるゝソリダリテイの説即ち相互援助主義は其の思想の淵源する所遠く數千年前の太古にあつて、希臘人若くは羅馬人なども、疾く既に了解し居たる所なるも、晩近の學界に於て特に此の思想發達し、社會哲學に屬するアラユル學科に於ては概皆之を以て研究の題目とするに至つたのである。故に今茲に表示の論題を掲げて此の思想の一斑を記述するは必ずしも無用、無益の事でもあるまいと思ふ。

余は本題に入るに、先も茲に一言して置かねばならぬことはソリダリテイと云ふ言葉の起原である。元來此の *Solidarité* なる語は佛國民法中に用ひられたる言葉であつて、債務の連帶責任を意味したのである。而して其の本は太古羅馬の法學者が矢張連帶責任の意味に使用して居つた *Solidum* なる語より變化し來つたのであ

つて、之を稍々近世的の意味即ち社會經濟學上の用語として使用したるは例の有  
名なる經濟學者バスマチア(Baschiaz)である(ピエール・ルルウが先きに使用したと云ふ  
説もある)然れども最近又更に進んで此の思想を社會主義に適用して、廣く一般  
にソリダリテイの語を普及せしめたるは佛國代議院議長レオン・ブルジョア氏(過  
激派社會黨の首領)であつて、彼は一八九六年 Nouvelle Revue 紙上へ La Solidarité と題  
する論文(其後ソリダリテイ哲學と題する單行書となして發行す)を公にしたるよ  
り、世上の評判となり、遂に一派の學派を形成して彼が思想を主張するもの益々盛  
なるに至つたのである。

ソリダリテイの思想の系統を詳論すれば、古今の學者各々其の意見を異にして、  
判然と之を類別することは出来ないのである、例へばバスマチアは主として古典派經  
濟學者の立場にあつて、其の見地より之を説明し、コムト(A. Comte)は社會哲學より  
之を觀察し、ブルジョアは社會主義者として同臭味の解釋を下し、ブルジョア自身  
はソリダリテイは社會主義とは異なつて居ると主張す、又社會學者エミール・デュ  
ルケム氏(Emile Durkheim)は専ら倫理學の方面を高調して、此の思想の基く所は倫

理問題に存するが如く論じて居るのである、故に茲に此の思想を我が日本の學說  
に適用して記述批判するには如何なる見地に立つて、如何なる方面より之を考察  
すべきかと、先決の問題であるが、日本の學者の此の問題に對する態度は、十中の八  
九まで社會倫理學的の傾向を有し、純乎たる經濟學上の問題と思はるゝものすら  
悉く倫理の方面より之を判斷するの學風なれば、ソリダリテイの思想も亦その通  
りであつて、宛もデュルケム氏が其の著 La Division du travail Social に於て機械的ソ  
リダリテイと有機的ソリダリテイと二つに區別したる後者、即ち有機的ソリダリ  
テイは略々該當する意味の思想に外ならないのである、即ち之を換言すれば廣き  
社會的の意義に於ける分業に基づきたる倫理的のソリダリテイが我が日本の學  
說に最も能く適合する思想であると云はねばならぬ。

(附言デュルケムの分業論の或る部分は純乎なる經濟學說としては原因と結  
果とを取り違へ居らざるかの非難なきにあらず)

デュルケムの意見に依れば人間の倫理觀念は群衆生活に起因するのであつて、  
其の集團は一家族でも一法人でも、一部落若くは一國家であつても、將又國際間で

あつても、何れにしても此の集團が倫理觀念の發生する基本であると觀察したものである。即ち換言すれば倫理規範を遵守すべき義務的觀念は孤立的個人の頼み少なくして何事も自ら社會公衆の援助に待たざる可らずと云ふの感覺より發生するものなりとするのであつて (Bulletin de la Société française de Philosophie. Vol. VI. P. 128. 参照) 彼が意見では倫理的行爲の神聖無上なることは、ソレが社會的生産物であつて、個人的の故造物にあらずと云ふの事實に歸因するとするのである。日本の學者が仁とか義とか道とか徳とか稱するのは、全然此等の思想と其の歸趣を同じくして居るのである。

倫理を群衆生活の見地より觀察するの説は、勿論支那よりの傳來なるも、日本に於ては初めには山鹿素行、熊澤蕃山等ありて、大體既に之を論述し居るも、其の最も明白に之を説明して、倫理的ソリダリテイの思想を主張したる者は、荻生徂徠である。徂徠は其の得意の著作、辨道に於て、孔門之教、仁爲至大、何也能舉先王之道、而體之者仁也、先王之道安天下之道也、孟子曰仁也者人也、合而言之道也、荀子稱、君者群也、故入之道非以一人言也、必合億萬人而爲言者也、今試觀天下孰能孤立

不群者、士農工商、相助而食者也、不若是則不能存矣、雖盜賊必有黨類、不若是則亦不能存矣、故能合億萬人者君也、能合億萬人而使遂其親愛生養之性者先王之道也と云つて居る。此の時代の學說殊に古典的の漢文に依つて書かれたものは往々其の意を盡さざる所あるは我々の甚だ遺憾とする所なるも、兎に角この一文などは明かにデュルクムが其分業論に於て、長たらしく説明したる主旨の主要を説き盡くし、倫理とソリダリテイの關係、ソリダリテイと分業との關係を簡單に論述したるものと云ふべきであらう。

荀子が君は群なりと云ふの意は仁即ち人道を表象するものが君であつて、所謂人道とは個人に就て云ふにあらず、一國一社會の群衆を形成する社會的精神 (Social Mind) を指示するものにして、一國一社會に君たるものは即ち其の社會的精神の權化であるを認めたのである。古への大聖人堯舜が億兆の心を以て心とすと云はれたるは此の事であつて、君徳の君徳たる所以は民衆の心を代表するに過ぎないものである。徂徠の説は天下を治るの道は先王の道であつて、先王の道を具體化して、之を事實に施すのを仁と稱するのである。而して仁を徳の至大なるものとなし、孔子

の致此の一字に外ならずとするは何故なるかと云へば、人間の社會に處する誰一人として孤立不群なるものなく、四民相頼り相助けて生活するのであつて、若し斯くの如くせざれば全然生存が出来ないと云ふの理由に歸着するのである。之を要するにソリダリテイ即ち相互援助主義は生存の必要に基くのであつて、生存の必要を完全に充實するのが倫理の極致たる仁の本旨である。と云ふに外ならざるのである。

ソリダリテイが生存の必要に基づくこと云ふことを今少し明白に論述すれば廣き意義に於ける分業が基本的の社會法であつて、人口の増殖、人智の發達に伴ひ、歴史の各段階に行はるゝ分業の性質及形狀が夫れゝゝ特種の社會體制を陶冶現出するのであるが、若し茲に此の變遷化成(Transformation)の大勢に反して、専門的の職業に従はなかつたならば、其の人は絶対に生存は出来ないのである。故に生存の必要寧ろ生存競争に打勝つゝの必要あるが爲めに分業の必要を來し、分業の必要あるが爲めにソリダリテイの必要を感ずるのであつて、分業の範圍が擴大されるれば擴大されるゝだけソレだけソリダリテイの強固を要求するに至るのである。

分業の思想はソリダリテイそのものゝ思想と共に洋の東西を問はず、太古より行はれつゝあつた舊思想の一つなれども、我が日本の學者にして、比較的早く之を唱へたる者は矢張素行若くは蕃山であつて、就中蕃山はハッキリと之を説明して「農業ヲ事トスル者ハ鋤鎌ヲ造ルニ暇ナシ、鋤鎌ヲ造ル者ハ耕作ヲ兼マル事能ハス、故ニ農人ハ易ルニ五穀ヲ以テシ、鍛冶ハ農具ヲ造リテ互ニ交易シテ各其所ヲ得タリ、萬物皆如此、又農人職人自來テ易ルニ暇ナシ、商人コレヲ買取テ相通ズ云々(集義和書)と云つて居るのであるが、是れはアダム・スミスより殆んど一世紀以前の事であつて、其の説明の精粗固より同日の論にあらざるも、兎に角分業の根本思想は支那は勿論の事、日本に於ても學者間に疾くより認められたる通説である。我日本に於て社會生活が分業の必要を生じ、分業の必要がソリダリテイの觀念を高めたる徑路などを秩序的に解説して居る者は、余の未だ聞知せざる所なるも、前記蕃山のソレの如き粗笨なる分業の思想が「人間もろすぎ(徂徠の言)の觀念を養成するの淵源なりしことは、固より余の辨を待たざる所であらう。

天明寛政の頃より文化文政の交に於ける卓見家として知られたる本多利明は

其の著「經世秘策後篇」に於て東洋人の常用語なる國恩と云ふことを全くソリダリテイの意味に解釋して居るのである。利明の説はコウである。「萬事萬端、人間界の事は衆人より相互に扶助して上天子より下庶人まで其の一身を立つるものなれば、世に獨立といふことは決してならざるなり、是を名けて國恩と云へり、悉皆衆人相互に相助け相救て、今日の身を立、家を保ち世を送るなり」と(日本文庫本四三頁参照)云つて、ソリダリテイを國恩と云ふことに結付けたるは一寸面白き考へなれども、此の點に於ては漢學者若くは雜學者などよりは心學者を以て稱せらるゝ一派の學者中に餘程氣の利いた意見があつたようである、即ち茲にその二三の例を擧げて立證して見よう。

元祿頃の著作として傳へらるゝ心學書の一つなる「百姓傳記」と稱するものは、矢張分業の立場より佛氏の説にある衆生恩と云ふことを説明して「諸國安居ツカマツル事ハ御主君ノ御恩ナリ、一切衆生ナクシテハ世ノ中ハタ、レズ、先耕作ヲセンニ鎌鋤等ノ農具ヲ打チ出シ、其外アルトアラユルモノヲコシラヘ、諸民ノ用ニタツハ鍛冶ナリ、醫者ハ人ノ病ヲナヲシ、大工ハ諸人ノ家内ニツカフ色々ノ道具ヲコ

シラヘ、又家ヲ建ツル、商人ハアラユル物ヲ諸國ヨリ買求メ諸民ニ賣テ自由ヲサセル、異國ノ珍物ナリト雖今本朝ヘ渡ラヌモノナシ、又日本ノ珍物モモロコシヘ渡ル也、我々一人宛居テ(孤立シテ居テ)ハ物ノ自由達スル事ナシ、皆衆生ハ恩ナリ」と述べて佛氏の衆生恩が分業より生ずる相互援助の根本思想なることを論じて居るのハ中々面白き意見である。

心學者は神儒佛三教一致の教を主張する者なるが彼等の多くは大抵皆この衆生恩をソリダリテイの意味に解釋して居るものと見へ、前記「百姓傳記」と殆ど同時代頃の著作と思はるゝ「盲安杖」と云へる古き心學書(一説に徳川初代頃の人鈴木某の著作なりと云へり)には「また衆生恩と云ふことあり、農人の恩、諸職人の恩、衣類紡織の恩、商人の恩、一切の所作互に相助けらるゝの恩、確かに之を知て人を隔ることあるべからず」と云て居るも、亦ソリダリテイを衆生恩と觀察したのである、又之れはゾット其の後の著作であるが「我かしこと題するものには、天下の恩、主君の恩、佛の恩、神の恩、五常の恩、猶ほ獨り獨りを分けて云ふときは、誰か恩惠に離れて自立のものやある」云々とあり、何れも皆心學者一流の解釋であるが、茲に今一つ、御世の

恩澤と稱する心學書同派著名の學者脇坂義堂の作にも頗ぶる奇拔の名文あり曰

世尊は草木國土悉皆佛なりと宣ひしなり茶屋は茶屋佛にて酒や飯を喰はせて、人を救ひ、我は客佛にて茶屋を助け、駕籠かきは駕籠かき佛にて我を助け、我は駕籠に乗て錢を與へて駕籠かきを救ふ、牛馬は牛馬佛にて人を救ひ、馬子は馬子佛にて牛馬を助け、互に助け助けられて安樂淨土の此の國に住む御代の御恩ぞ有難し云々(通俗經濟文庫本七〇乃至七一頁)

心學者は三教一致の主旨を町家の番頭、手代、丁稚、小僧を相手にして講演したものであるから、其の口調は固より卑俗にして經學者などには平素痛く賤しめられて居つたに拘はらず、其の説く所論する所は却つて實際に適切にして、社會の真相を看破して居るのであるが、ソレばかりでなく、今日我々の眼で見れば、右等卑俗の言葉の中にも斷片ながら往々貴重の學説を含んで居る様に思はるゝのである、以上に掲げた二三の例に依つても、彼等が如何にソリダリテイの根本思想を有して居つたかは明かであらう。

前に述べた佛國ソリダリテイ派の首唱者として有名なるレオン・プルジョア氏は「人間は必然的に生れ乍ら羈絆に繋かれて此の世に出たものであつて、何人も合法的に此の羈絆を離脱する事は出来ないのである、若し何人が敢て此の離脱を肯んずるものあれば合法的に生存の權利なし」と主張して居るようであるが、Leroy BeaulieuのLe Collectivisme第三篇第一章を参照すべし、彼の意見では人間は生れながら過去の人道徂徠の所謂仁に同じに對する債務者であると同時に未來の債權者である、故に現在の社會に於て富裕に生付きたる者は未來の債權者に社會的債務を清算するの義務を負つて居るのである、即ち貧民が富者に此の義務の償還を請求し、富者が合法的に遲滞なく之を償還するのが正義であると説明して居るのであつて、ソレは心學者のみならず他の學者の説も主意は略々同一である、(が人間は恩をしようつて生れ出で恩に依つて生存して居るのである、此の恩を忘却しては生存の權利なしと云ふのである、之を要するに彼等の意見は生存の權利は衆生、恩を償還するの義務を條件として認めると云ふことに歸着するので、其の根本思想に於てはプルジョア氏の意見と大差なしと云ふも過言ではあるまいと思はる。

一體現今の無學なる人は恩と云ふと乞食が只で物を貰ふか何にかの様に解すれども、ソレは大なる誤解であつて、恩と云ふ言葉の眞の意義とその歴史的の解釋を知らないからである。普通の字引を見れば、成程恩の字の和訓にはメグムとか、アワレムとか云ふことがあるけれども、恩はメグムの故なくしてメグマレ、アワレムの理なくしてアワレまるゝと云ふことにあらず、例へば父母の恩と云へば父母が父母たる Moral Obligation を果すからであり、又主君の恩と云ふも同じ事で、主君が主君なる Moral Obligation を盡くすからであつて、相手か果すべきの義務を果し、盡くすべきの責任を盡くすが故に始めて恩と云ふ觀念が生ずるのである。大石良雄が師事し、乃木大將が特に景慕せられたる山鹿素行はその「語類」に於てコウ云つて居る、

凡そ同じく是人にして、質を委ね身を棄て主人をあがめ敬ふこと、全く人の力にあらず、唯天命のなす所也……至つて凡卑貧賤の身なりと云とも天性をば各具足す、故に祿厚く財豊なりと云とも、禮をかき義を背ては心に怒る所出來て報謝の志うすく賢者は身を退き知者は材をあらはさず、彼の巧乞の賤き口をもらうて世を渡る者も、嗟來の食をば不食のためしのあれば也……古より君を舟にたさへ、臣を水に比せり、

君の臣を使ふ所、禮節詳かにして、臣君恩を感ずること深きときは水魚の思をなすが故に、事無不成、臣そむき下怒れば却て君をくつがへす、これを荀卿子たさへて君舟也、臣水也、水所以載舟、亦所以覆舟とたとへたり、齊の景公晏子に問に忠臣の道を以てす、晏子答へけるは忠臣有難不死、出亡不送也と云、景公不審を起して、日常に祿を豊にし、位を高くし置くに、國の難に不死、君の出亡に不送は忠臣と云がたし、晏子答けるは諫を奉りて用ひ玉へば國に難なく、君の出亡もなかるべきが故に、忠臣は死するとも送ることあらず、諫めて用ひられず言つて聞き玉はざるが如き君の難に死し、又その出亡を送るは皆妾死詐忠なりと云へり云々

素行は「語類」卷四「君臣之禮」に於て既に斯くの如き説を爲し、又其の卷十三「君恩之重」の章に至り、更らに言を爲して「君臣の間は他人と他人の都合にして、其本に愛惠すべきゆへんあらざれども、一時の約束、一旦の思入を以て、其祿をあたへ、其養を全からしむ、これに因て父母を養ひ妻子をはごくみ、從類を扶助し、知音を助長せしむること皆君恩にあらずと云ことなし」と云ひ、又「人皆新恩に浴するときには必ず其事を重く思ひ入といへども、年月押移りては初の心改めて、志に懈怠あるもの也、其の恩に大小厚薄の差別はあるべけれども、我一分の上をよく考へて其相當の君恩を、晝夜に不<sub>レ</sub>思ば可<sub>レ</sub>勤奉公をつとめざる可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之也」と云へり、總て是等の意見に



依つて之を見れば恩と云ふことは固より絶對の抽象的概念にあらずして、相對的の現實關係を示指する言葉であつて、恩を施す者も之を受くる者も共に當然爲すべきの義務を爲さなければ恩の觀念は生じないのであらう、如何に君臣の間柄であつても、君は臣の爲めに盡くし、臣は君の爲めに盡くさなかつたならば、恩も成り立たざれば忠も成り立たないのである、されば社會を組織する人々が相互に善事を爲し、相互に利益を受けつゝ、人道を完了するのが、衆生恩に酬ゆる所以であつて、個人と衆生とは正さしく君臣の間柄に異ならないのである。

近來卑俗に社會奉仕の新熟語を工夫する者あり、大に人氣に投して流行の姿なきにあらざるも、其の實此の新熟語の内容は全然衆生恩に酬ゆるの意義であつて、其の思想の由來は別に新らしくも何でもないのである、然れども衆生恩の語は陳腐であつて、而かも甚だ佛臭い嫌がある、社會奉仕は何人の工夫に出てたるや知らざるも、ソリダリテイの思想を實にするの言葉であつて、群衆陛下の鴻恩に酬ひ奉るの意を表彰するには最も恰好の言葉であらう此の事は餘事ながら茲に附記して參考に供するのみ。

## 聖 トーマスの 奴隷論

高橋 誠 一 郎

曾つて他の機會に於て言へるが如く、基督教は社會的病患を救治するが爲めに熱狂的に正義と平等とを説ける希伯來の豫言者と、國家的拘束を離脱して個人的生活の完成を企圖せるストア哲學に由つて薰化せられたる精神的雰圍氣中に生れ出でたるものなり。基督教は人間本來の平等を教へ、共同團體若しくは國家の界域を越えて、一切の階級と種族とを抱擁せる同胞主義を唱道せり。凡そ何人と雖も、他人をして自己に従屬せしむることを欲するが爲めに、縦令ひ之れを強要す可き實力を有したりとするも、彼れ等よりして服従を要求す可き權利を有するのと能はざるなり。統治權者の他を支配する正常なる權威は惟り劍を佩びて神意を執行するが爲めに神によりて賦與せられたるものと看做されたり (W. Cunningham)